

実践的科学教育に力

2015～17年度に科学技術振興機構（JST）の支援事業「中高生の科学研究実践活動推進プログラム」の採択校となった玉野高は、プログラム終了後も引き続き、実践的な科学教育に力を入れている。生徒が自分で選んだテーマでの研究や結果の発表を通して、学ぶことの楽しさを感じている。（岡本遙加）



中学生に研究成果を発表する玉野高の生徒（右の2人）

プログラムは科学研究が目的。玉野高では3の実践を通して、生徒の年間で希望する生徒が意欲、能力を育てること、ちりめんじゃこに含ま

れる小さな魚介類「チリメンモンスター」の分類▽ウミホタルの発光条件▽タンポポの綿毛の構造と再現などの研究に取り組んだ。27日はプログラムの地域への還元を目的に、校内で中学生を対象にした初の研究成果発表会を開き、17年度に研究を実践した3年生3人が発表。荘内中の1年生3人が参加した。

柏谷啓太さん（17）が備前焼における胡麻の生成過程を説明し、星島大輝さん（18）と入船力也さん（17）は電線などに応用できるセラミックスの一種・高温超電導体の合成について紹介。それぞれ内容をまとめたポスターや備

中学生に成果発表

前焼の実物などを使って解説した。柏谷さんは「中学生にも分かるように話すのは難しかった。これをきっかけに科学に興味を持ってくれたら」と振り返った。

研究体験もあり、中学生は高校生の指導を受けながらチリメンモンスターをピンセットでつまんで観察したり、液体窒素で花や風船を凍らせたりした。大賀健生さん（12）は「液体窒素でいろいろな物を凍らせたのが面白かった」、大賀佑哉さん（12）は「超電導体に興味を持った」、三宅徠喜さん（12）は「理科は苦手だけど研究をしてみたいくなった」と感想を語った。

プログラムを担当した玉野高の藤田学教諭は「生徒の学習意欲が高まり、教員の指導ノウハウも蓄積された。今後継続しながら小中学生の学習支援などを通して成果を地域に役立てたい」と話している。